

2023年11月の総評：木下龍也

夜九時を野菜炒めで賑やかす

一人分には多すぎるほど／青桐紗矢

「一人分には多すぎる」と頭ではわかっているが「賑やか」さなければならぬほどの寂しさや悲しみや不安が主体の心にあるのだろう。静寂が嫌ならばYouTubeやテレビやラジオという手もあるが、「野菜」を「炒め」という能動的な行為によって、五感のすべてをそこに集中させなければ掻き消せないほどの感情なのだ。野菜の色で視覚を、匂いで嗅覚を、炒める音で聴覚を、フライパンの手ざわりで触覚を、味見によって味覚を「賑やかす」。感情をやり過ごすこともできるし、食欲さえあれば栄養も摂れるし、かなり合理的な方法なのかもしれない。

爆発の中ほどまでお進みください

君が始めた戦いだらう／小宮颯人

「爆発」とあるからミサイルなどの武器が使用されている「戦い」なのだろう。個人間の「戦い」ではなく、国と国くらいの規模の「戦い」だと見なすことができる。戦争だ。そこで起こる「爆発の中」に戦争を「始めた」「君」はいない。戦争指導者の多くがそうだ。巻き込む者は「爆発の」外にいて、巻き込まれた者たちが「爆発の中」で死ぬ。その怒りの表明である。が、ただ「始めた」「君が」死ねばいいと伝えているわけではない。「中ほどまでお進みください」というのは満員電車などでよく耳にする駅員さんの丁寧なアナウンスだ。主体もそれに則って、君を「爆発の中ほどまで」丁寧に導くと見せかけて下句で口調を変える。単に死ねと言われるよりも、このほうが怖いからこうしているのであって、そのくらいの恐怖を与えたいということだろう。巻き込まれた者たちは、それよりももっと強い恐怖を感じているのだから。

ため息が視えた夜明けの駅までの

じてんしゃの後ろをありがとう／松下誠一

大人の表情の上句と子どもの表情の下句。真面目な顔がふっとほころんで柔らかい表情に変わる。言い方がむずかしいのだが、上句は歌人モードの力の込め方で書かれており、下句は素の状態で親しい友人にLINEをするときくらいに力も言葉も抜いて書かれている、と思えるように言葉が選ばれている。初句から三句までにカ行の音を配置して固さを演出し、四句と結句のほとんどをひらがな表記にしてやわらかさを演出する。「後ろ」がひらがなにひらかれていないのは、過度な演出を防ぐためかもしれない。あらゆる気配りがなされており、そのどれもが成功しているように思う。巧い、としか言いようがない。恐ろしい。

信号が点滅すれば焦ったり

しながら足はわたしを運ぶ／藤井柊太

「わたし」が「焦ったり」「足」を「運」んでいるのではなく、「足」が「焦ったり」「わたし」を「運」んでいるという捉え方。そして、それを捉えているのは「わたし」だ。「わたし」と「足」の主従関係が逆転しているように思えるが、意識はこれまで通り「わたし」にあるままだから、主従関係の逆転というよりは、「わたし」と「足」が別々の生物として、たまたま共存しているというか結合されているだけの印象を受けることができている。面白。これまでそんなふう考えたことがなかったのは、「信号が点滅」したとき、僕の「足」と僕の走る／走らないという意思決定がたまたま一致して、幸運にも一致し続けてきたからなのかもしれない。

吐く息が泡だった頃の

ぼくたちが

月だと思って見てそうな花／穴棍蛇にひき

水中から見上げると「月」も、その光に照らされた「花」も、同じく水面に張り付いていて、大小の差はあれど、遠近の差は掴みにくい。けれど、視界のなかにそのふたつがあるとき、どちらが「月」なのかを間違えることはないはずで、それは何が「月」で何が「花」かを陸上で「ぼくたち」が知っているからだ。人類の祖先である魚類はおそらくそういうことを知らない。というか「月」も「花」も知らないはずだから、「花」を見ることができても、それが何かはわからないだろうし、「月だと思って」「花」を見ることは不

可能なはずだ。だから「見てそうな」なのである。実際に魚類「だった頃」まで退化することはできなくても、想像ならばそこまでさかのぼることができる。もし「ぼくたち」が魚類だったらと考え、ニッチなシーンを選び取ってくる。その潜水力が素晴らしい。

バックミラーを抜け出したくて 少しずつ 冬夜の後部座席に沈む／ひろみ

場面は「冬夜」だから何かしらの帰路だろう。子どもの頃は部活や塾の終わりに迎えに来てくれた親の車でよくやっていた。反抗期というのも思春期というのもあっただろう。迎えには来てもらうが、とにかくほっといてくれ、疲れているんだしゃべりかけないでくれ、という気持ちで親の視線から外れていく。大人になったいまもタクシーでときおりしてしまう。もう反抗期でも思春期でもないし、別に運転手さんのことが嫌いなわけではない。だが、やはり見られることを、話しかけられることを穏便に拒絶するために「少しずつ」「後部座席に沈む」。運転してもらう側である以上、車内でひとりきりになることはできないが、背もたれを後頭部でなぞりながら「沈む」と、少しだけ透明人間や幽霊になれたような気がして安心するのだ。

三年後右折をするか迷ってます／音無早矢

実際に自動車を運転をしているのだとしたら長くても一、二時間「後」くらいだろうから、これはおそらく進路とか人生とかそういう話をしているのだと思う。「右折」をした先に何があるのかはわからないが、現状、直進方向にはなく、このまままっすぐに進んでも辿り着けないであろう夢や目標へ自身の舵を切るか「迷って」いるということだと僕は読んだ。百年「後」、千年「後」でも音数的には成立するが、それでは神の視座に個人的な悩みを手渡してしまうことになる。そちらへ舵を切らずにリアリティのある「三年後」を選ぶことができたのは正解だ。「三年後」に「右折を」してみるのもありだし、「右折をする」チャンスは「三年後」以降にもあるだろうし、「右折を」してみてやばいなと思ったら、あと三回「右折をする」と元の道に戻ることができる。

明日からこの革ジャンを家とする／紅好人

「革ジャンを家とする」メリットは、土地が不要なことである。他人の権利を侵害しなければ、ベンチや砂場も一時的な居住地と見なすことができるかもしれない。仮に立ち退きを命じられたとしても「家」ごと移動可能だ。雨風はしのげず、居住スペースから常に頭部と下半身がはみ出ているため、冬は生命が危険に晒されることもあるだろうが、その場合も屋根や壁や空調設備のある建物内に「家」ごと移動可能である。また、一般的な「家」を購入するよりもはるかに価格が安い。一般的な「家」を購入した場合との差額を考えれば、浮いた金額で毎日ホテルに「家」ごと泊まってもいいくらいだ。郵便物に関しては、親や親戚の住所に送ってもらうようにするか、ホテルのフロント預かりにしてもらえばよい。お金がないのであればホテルではなく「家」ごと親や親戚や友人の住居に転がり込むことも可能だ。「明日から」も未来は明るい。

それぞれの孤立の形 サボテン／氷丸

定型をうまく利用し、二句と結句のあいだに置かれた一字空けを無音の一拍として読ませる。本来、文字があるはずの、音があるはずの場所に何もないために、読む側は何か受け取るべきだったものが受け取れなかったような、そんな寂しさを感じるのではないだろうか。遠景の荒野にポツンポツンと「それぞれの」ポーズで直立する「サボテン」が目には浮かぶが、曇り空で、風の音しかないような風景を想像してしまうのは「孤立」という言葉選びもあるが、やはりこの一字空けの効果に引っ張られるためだと思う。造形に違いはあれど、みな「それぞれ」に「孤立」している。この句の風景に対峙するとき、自分自身もそんな「サボテン」のひとつなのかもしれない。

S E XのXだけがふざけてる／杉本太

どういう状況で詠まれたのか、と余計な想像をすると初読の衝撃が薄れてしまいそうなので、これから書くことは薄目で読んでほしい。例えば、Aさんが紙に「S E X」という3文字を書く様子をBさんが見ている。Aさんは「S」→「E」→「X」の順に書いていくわけだが、最後の「X」を書くときに恥ずかしくなり、わざと「X」を大きく書いたり、変な形に書いたりし

た。この思春期っぽい状況をBさん視点で詠んだ句ならば「Xだけがふざけてる」が理解の範囲内に収まる。が、全然そうではなくて、純粹に「SEX」という文字列において「Xだけがふざけてる」と感じている人の句だとしたらどうだろう。僕には理解できない。でも、そういう他人の思いもよらなさとかわけのわからなさにぶち当たったときの衝撃って、何かを理解することと同じかそれ以上に面白いものだ。だからおそらくこの句には、ただぶち当たただけでいい。この句には、というか詩って全部そうなんじゃね？と評を書きながら思ったりもする。

以上です。たくさんのご投稿ありがとうございました。

12月のご投稿も楽しみにしております。メリークリスマス。よいお年を。

木下龍也